

京都大学大学院文学研究科/21世紀COEプログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

ヨーロッパにおける人文学知形成の 歴史的構図 NEWSLETTER

No. 1

2004/9/28

ニューズレター発刊にあたって

研究会リーダー 南川高志

本研究会は、同じく京都大学大学院文学研究科西洋史学専修を中心に組織されたCOE研究会「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」（リーダー服部良久教授、2004年3月で活動終了）の成果を引き継ぎ、ヨーロッパとそれを特徴つける「人文学知」を歴史学の立場から探求することを目的としたものであります。会の趣旨のより立ち入った説明は、「研究会の趣旨」に譲りますが、最も簡潔にその目標を示すとすれば、文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」において、「人文学」とその意義をヨーロッパ研究を基本に据えながら深部において探求する役割を担うことであります。研究会の名称にある「人文学知」とは、ヨーロッパにおいては古代ギリシア・ローマに発するいわゆる「人文学的教養」をまずは意味しますが、本研究会ではこれにとらわれず、今日日本の大学の文学部や教養学部等で研究・教育されている学問の諸分野、あるいはより広く法律学などもその視野に入れて、そうした学問の形成と発展、さらにはその社会的意義を、直接的に、あるいは間接的に解明してゆきたいと考えております。その際、方法的には歴史学研究の立場が基本となりますが、これにこだわらず、他の研究の分野からも助言や刺激をいただいて、研究の内容を豊かにしたいと願っております。

研究の内容は、古代ギリシアの学塾から現代のヨーロッパの大学における研究・教育まで、また社会的エリート階層の高度な教養から民衆のリテラシーや文化まで、その検討範囲に入れることにしております。そのために、狭義のヨーロッパ史研究ばかりでなく、哲学研究や文学研究、さらには教育学・教育史研究の成果まで必要としております。研究の実施によって、ヨーロッパに特徴的な人文学知のあり方を究明するとともに、ヨーロッパ人研究者のこ

の問題に関する意見を聞き、討論することも重視しており、ヨーロッパ人研究者を招いての国際シンポジウムなどを開催したいと希望しております。

研究会の活動については本ニューズレターおよびホームページ上で随時御報告いたしますので、御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

<研究会の趣旨>

文学研究科西洋史学専修が中心となって活動した「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」研究会は、前世紀の終わり頃から統合に向かってめざましい変化を遂げつつあるヨーロッパを、歴史学の観点から改めて捉え直すための多面的な研究をおこない、多くの具体的な成果を上げた。本研究会はその問題関心と成果を受け継ぎ、さらに深化しようとする試みであり、ヨーロッパ文明の最高の産物といって過言でない「人文学知」(humanities)を取り上げる。ここでいう人文学知とは、具体的には古代ギリシアにおいてパイディアとして誕生し、ヨーロッパの歴史的歩みの中でいわゆる人文学的教養として発展してきたものである。かの歴史家ヤーコブ・ブルクハルトは、ヨーロッパの社会は古代ギリシア以来の古典的精神を受け継ぐ者によってのみ形成され、この精神の連続性こそがヨーロッパのヨーロッパたる所以であると喝破したが、人文学的教養はまさにこの精神の基盤であり本体でもあって、ヨーロッパをヨーロッパたらしめている本源的なものともみることができる。しかし、その内実や意義は、同じヨーロッパにありながら、地域や時代によって大きく異なるばかりでなく、ブルクハルトより1世紀以上の年月を経た今日、改めてヨーロッパにおけるその歴史的意義が問い直される必要があるろう。

本研究では、ヨーロッパ史上の各時代や地域における人文学的教養の様態やその特質を明らかにすることにまず努めることとなる。その際、人文学的教養の内実だけではなく、その創造者や担い手に着目し、時の政治的社会的な状況との関係を重視して、その形成と発展を解き明かすことを試みる。例えば、古代ローマ社会にあっては、修辞学を核とする高度な人文学的教養は、元老院議員身分を中心とする帝国エリートによって担われ、同時に彼らにとってそれがエリートたる証となっていたのであった。また、19世紀から20世紀初め頃の西欧諸国においては、古典学の教養が大学、およびその前段階である中等教育機関によって熱心に教授され、それぞれの国の指導的人物の養成に重大な関係を有していただけでなく、そうした「教養」を持つ上層の人々をそれ以外の人々から社会的に区別する規範ともなっていた。従って、本研究会では、古代から近・現代に至るまで、人文学的教養の担い手となった集団を正確に把握し、その構造から心性まで広範囲に問題とし、厳密に分析することが重要である。

本研究会の活動は、さらに進んで、高度な教養の担い手として想定される貴族やエリート階層にとどまらず、広く一般の人々の「知」の様態にも目を向け、リテラシーの問題も念頭に置きながら、各時代・社会における教養の形成・獲得の過程を立ち入って検討することへ

と向かう。そこでは、古代ギリシアの「学塾」から近・現代の大学教育まで検討の対象となり、近年の教育社会史的研究の諸成果も参看されることとなろう。とくに、大学が有する人文学知形成の意義を歴史的に問うことは、世界史の中でもとりわけヨーロッパ史上において初めて十分に可能な作業であり、また今日のわが国の大学や社会にとってもきわめて有意義な考察となる。

ヨーロッパを、「人文学知」の観点から問い直そうとするこの研究会の試みは、ヨーロッパ人でない研究者がヨーロッパの本質を問い直そうとする挑戦とあってよい。この試みを効率的におこなうためにも、また独善に陥らないようにするためにも、ヨーロッパ人研究者の研究協力は必須であり、このために、研究会は構成員による海外調査や外国人研究者を招いての国際シンポジウムの開催を予定している。

以上のような活動目標とその実践によって、グローバル化した現代における人文学知の意義を再発見できると同時に、変化しつつあるヨーロッパの本質に関して新たな認識を得られるものと期待される。

<研究会メンバー>

京都大学大学院文学研究科内

南川 高志	西洋史学専修／教授／研究会リーダー
谷川 稔	西洋史学専修／教授
服部 良久	西洋史学専修／教授
小山 哲	西洋史学専修／助教授
佐藤 昭裕	スラブ語学スラブ文学専修／教授
川添 信介	西洋哲学史専修／教授
高橋 宏幸	西洋古典語学西洋古典文学専修／教授
梶 さやか	西洋史学専修／大学院博士後期課程
宮坂 康寿	西洋史学専修／COE研究員・教務補佐

学外研究員

上垣 豊	龍谷大学法学部／教授
佐々木博光	大阪府立大学総合学部／助教授
金澤 周作	川村学園女子大学文学部／専任講師
井上 文則	関西大学／立命館大学等非常勤講師
藤井 真生	日本学術振興会特別研究員

■ 活動報告

● 第1回研究会

日 時：2004年7月10日（土）午後1時～5時

会 場：京大会館・212会議室

報告者：石坂 尚武氏（同志社大学教授）

「ルネサンス人文主義における「修辞学」の機能とキリスト教」

西村 賀子氏（名古屋経済大学教授）

「西欧における古典の発見と普及をめぐる」

第1回研究会は、イタリア・ルネサンス史の石坂尚武氏と西洋古典文学の西村賀子氏を招いて、ともにルネサンス期の人文主義者の活動に焦点を合わせたご報告をいただいた。石坂氏はまず、人文主義者たちの推進によって古典主義が高まりをみせるなかで、世俗的な価値観がこの時期の（都市）社会に浸透したことを指摘する。そして従来のキリスト教的価値観と新たに現れた世俗的価値観は併存・両立し得たことを強調した上で、ペトラルカをはじめとする様々な人文主義者たちの言葉を紹介し、修辞学がルネサンス社会において果たした役割と意義を明らかにした。

西村氏は古典の復興が近代ヨーロッパ精神形成の基礎となりえた理由を問い、古典の復興にテキストの読み方という観点から光を当てた。そして氏は当時の古典受容に見られる模倣と批判的分析という二つの相反する姿勢を浮かび上がらせ、その後次第に後者が主流となっていたことを指摘し、古典が絵画・彫刻を通じて同時代の民衆にも広く流布したことを図像を交えつつ示した。

二つの報告の後、本研究会から4人のメンバーがそれぞれの専門を踏まえてコメントをつけた。石坂氏の発表については、まず藤井真生氏がチェコにおける人文主義の展開を例に人文主義と宗教改革との関連および俗語の使用をめぐる論点を提示し、続いて梶さやか氏が16, 17世紀リトアニアのイエズス会士によるラテン文学を取り上げ、キリスト教的要素と異教的（世俗的）要素の併存関係に関する事例を提供した。

西村氏の発表については、南川高志氏が18世紀後半以降のドイツにおける古典学の発展を俯瞰し、近代においてもなお看取される古典に対するアプローチの問題が、専門科目としての人文学（歴史学）の独立と相俟って複雑な様相を呈していたことを指摘しつつ、その原点がルネサンスの段階にあることを確認した。それに対し、井上文則氏は古代に視点を置き、人文知の継承は各時代・各地域の民族による取捨選択を受けるものであることに注意を促した上で、ルネサンスに至るまでの古典古代のテキストの継承・消滅の問題にも目を向ける必要性を強調した。

コメント後全体的な質疑に移り、報告やコメントで提示された論点の他、イタリアとドイツの人文主義者の比較等にも討論がおよんだ。議論は尽きなかったが、人文主義が時間的・空間的に実に幅広い連関を有する現象であることがあらためて確認され、人文学的教養の意義を歴史的にトータルに問い直そうとする当研究会のレゾンデートルを再認識した。

（宮坂康寿）

【報告要旨】

報告 1

ルネサンス人文主義における「修辞学」の機能とキリスト教

石坂 尚武

ルネサンスは、イタリアにおいて15世紀を中心とする時期に高まった運動であった。この運動によって古典古代の価値観が見直され、広く復活するようになった。それまで「キリスト教的価値観」で支配されていたイタリアの人びとの価値観に加えて、この、古典古代の価値観の再発見を契機に、新たに「世俗的な価値観」が正当化されるようになり、ここに、ルネサンス的精神の本質の一部である「世俗的価値観」が少しずつ定着し、それが人びとの心に浸透し、古代人に学ぼうという気運が高まった。この古典主義の先頭に立った人が「人文主義者」と呼ばれる人であった。彼らは、古典の文献を捜し求め、読み込み、解釈し、その教えや文体の魅力を世に広めたのである。彼らは、大学などの学校の教師や都市の行政職役人や公証人などの仕事に携わった。そして注意すべきことは、このルネサンスは、「都市社会」を中心に成立・発展したということである。「キリスト教的価値観」によれば、死後の、来世では、むなしい、何の価値のない「世俗的名声」や、「世俗的榮譽」などの世俗的価値が、今や都市社会において、価値あるものとして、追求に値するものとして評価され、人びともてはやされるようになった。この意味で、ルネサンスは、基本的に世俗的集団の世界である「都市」の産物であるといえる。この意味で確かに、ルネサンス社会において、その文化・思想はそれ以前のものとは比べるならば、「世俗的価値観」の色彩が強まったといえよう。

しかし実際には様相はそう単純ではなかった。あくまで背景には「キリスト教的価値観」が強くあり、むしろそれとの調和が希求された。例えば、ルネサンスにおいて脚光を浴びた「世俗的価値観」の産物である「修辞学」のあり方が、このことを示している。「修辞学」は14世紀イタリアのキリスト教世界において、異教の学問の一種として非難されがちであったが、初期人文主義者ペトラルカの推進によって、むしろキリスト教信仰に有効なものとして位置づけられ、「修辞学」は人文主義研究を正当化するものとしてようやく機能することができたのであった。ペトラルカによれば、アウグスティヌスの「修辞学」は古代ローマの文化の恩恵そのものであり、この「修辞学」によってこそ、アウグスティヌスによってキリスト教布教がうまくなされたというのである。こうしてキリスト教と折り合いをつけながら、時代の要請に対応する武器として「修辞学」はようやく機能し始めたのである。すなわち、ペトラルカをはじめとする人文主義者によって、「修辞学」は、対立・抗争の激しいルネサンス都市のなかで、都市の政争に関わる上層市民の生きる手段として機能するものと考えられ、青少年の教育の重要な一部となり、ここにおいて古典学が19世紀のヨーロッパ社会に至るまで影響を与え、近世以後のヨーロッパの知識人の重要な教養の一部となる方向性

が与えられることとなった。しかし、注意すべきは、15世紀におけるペスト（「神の罰」と理解された）の頻発（2～20年周期）を背景に、15世紀のルネサンス社会に生きる人びとを支配した「キリスト教的価値観」も極めて強いものがあり、我々はルネサンスという時代を世俗的、古典的価値観のみで理解するのではなく、キリスト教的価値観との二元的把握によってアプローチしていかなくてはならないと考える。

報告 2

西欧における古典の発見と普及をめぐって

西村 賀子

1. はじめに

ルネサンスは、古典古代の遺産がどのように再生したかという観点からも興味深い時代である。現代は産業革命以降の近代に遡及すると一般にみなされているが、イマニュエル・ウォーラーステインは近代を、産業革命以前に十分に発達していた「近代世界システム」——西ヨーロッパで15世紀末に始まった地域間分業体制——を完成させたにすぎないとみなし、現代をその延長上に位置づけている。そうであるならば、「近代世界システム」を発展させた知的・精神的・文化的バックグラウンドはルネサンスと無関係ではない。

ペトラルカからエラスムスに至るイタリアを中心とする約200年間の人文主義的文化運動という意味でルネサンスとうことばを用いるなら、15世紀末の西欧での「近代世界システム」の誕生とルネサンスは年代的にややずれる。しかし人文主義の通時的な軸は16世紀フランスやエリザベス朝イギリスへも伸張したため、「近代世界システム」を生み出した文化的・知的母体はまさにルネサンスにあったと言える。つまり、今も地球規模に拡大している「近代世界システム」へと結晶していく文化的・精神的な核としてこのシステムを背後から強力に支えた知的パラダイムの究極的な起源は、ルネサンスに求められる。

2. ルネサンスにおける発見

では、ルネサンスにおける古典の復活とは具体的などのようなものだったのか。そして、なぜルネサンスは西欧近代の精神的基盤を形成したと言えるのか。

ルネサンスの人文主義で最も注目されるのは、中世の間ほとんど無視されていた古典古代のテキストや写本の発見である。その意義と恩恵は多大であるが、人文主義者たちが発見したのは写本とテキストだけではなく、むしろ新しい古典の読み方である。人文主義者たちは古典との真摯な対峙を通して、中世にはなかった新しいものの見方を獲得した。そして、世界を見るこの新たな眼差しは、一方では通時的な軸を通して連綿と受け継がれ、他方、共時的な軸を通して同時代の人々のなかに広く浸透していった。

3. 通時的な軸：古典の新たな読みの発見

8 - 9 世紀のカロリング朝、12 世紀の西欧、13 世紀後半の東ローマ帝国パライオロゴス朝などに古典復興の先例があったが、これらの先駆的古典再生が単発的かつ非連続的であったのに対して、時空を越えて拡大的・継続的に発展したところにイタリア・ルネサンスの最大の特徴がある。そしてルネサンスが後世へと連なる通時的な軸を獲得したのは、古典に向き合う態度が他の古典復興とは決定的に違ったためである。

ごく単純に言うと、15-16 世紀の古典の受容には対照的な二つの姿勢があった。15 世紀後半の無名の人文主義者たちの論争という一例に見られるように、一方には、普遍的・絶対的規範としての古典テキストの模倣および再生産を目指す立場があった。他方、人文主義運動の進展とともに現れ始めたのは、特定の時代状況のなかで産出された特異な歴史的産物として古典古代を眺める相対的・批判的な眼差しであった。ルネサンス初期には前者が優勢であったが、のちに後者が優勢になっていき、それによって古典研究は進展した。

4. 共時的な軸

ルネサンスの精神は人文主義的古典文献研究によってのみ普及したのではない。研究の担い手たちは実質的にはごく一部のエリートに限定されていたからである。同時代への古典復興の伝播を共時的な軸と呼ぶとすれば、この軸の形成に影響力を及ぼしたのは、視覚に直接訴える造形芸術であった。古典を主題とする絵画や彫刻は、芸術アドバイザーとしての人文主義的知識人の存在に触発されて数多く制作された。それによって古典文化への理解とルネサンス精神は、古典語リテラシーを持たない、より幅広い階層にも広がった。

とくに古典神話を主題とする絵画・彫刻はより多くの人々に古典が浸透する経路として重要であった。ギリシア・ラテンの神話はルネサンス以前もキリスト教的イメージへの読み替えによって表象されていた。つまり古典的モチーフとテーマは中世までは分離していたが、ルネサンス時代にこれらは結合した。古典的モチーフとテーマの統一に最も貢献したのはローマ詩人オウィディウスの『変身物語』であり、この作品は画家のバイブルとして絶大な人気を博し、ルネサンスから近代初頭の多数の芸術家に圧倒的な影響を及ぼした。

オウィディウス受容の跡を簡単にたどると、この詩人の写本は 11 世紀から増加し、その人気は 12-13 世紀に高まった。『変身物語』はキリスト教倫理と相反する要素を含むにもかかわらず、中世末期からは寓意的解釈によってキリスト教信仰との結合が強化されて好意に受容された。具体的には、14 世紀初頭の無名氏によるフランス語の『教訓化されたオウィディウス』(Ovide moralisé) や、1340 年頃にフランスの神学者ピエール・ベルシュイール(ペトルス・ベルコリウス) がラテン語散文で書いた『教訓化されたオウィディウス』(Ovidius moralizatus) などが大きな役割を果たした。しかし寓意的解釈の人気はルネサンスの進展とともに凋落の一途をたどった。とくに 15 世紀末以降、ルネサンス的なものの見方が優勢になるとともに寓意的解釈はすたれ、16 世紀に入ると人文主義者の側からもカトリックの側からも批判されて、ついにその歴史的使命も終わったのである。

イギリス 3 大学の古代史・古典学研究瞥見

南川 高志

わが国において、古代ギリシア・ローマに関する研究とその教育は、主たる担い手である大学の文学部がその学問の組織構造においておおむね哲学、歴史、文学の3学科で編成されてきたために、これら3つの学問ディシプリンに分けられて実践されてきた。すなわち、古代ギリシア哲学は哲学科で、古代ギリシア・ローマ史は史学科で、そしてギリシア・ラテン文学は文学科で、というように。しかし、古代ギリシア・ローマ学の本場であるヨーロッパではこのように分断されることはなく、むしろまとめられて1学部を形成し、それぞれの研究と教育が一緒になされていることが多い。1部局にまとめられていない場合でも、日本の大学では考えられないほどの諸学問の緊密な協力体制が保持されている。

例えば、イギリスのオックスフォード大学では、古典考古学 (Classical Archaeology) を含む古代史、ギリシア・ラテン語学と文学、そして哲学から Faculty of Literae Humaniores が構成され、ケンブリッジ大学でも Faculty of Classics の名前で、古代哲学、古代史、ギリシア・ラテン文学、および古典考古学が1学部を組み込まれている。ケンブリッジ大学には、研究・教育用の古代彫刻のレプリカを集めた古典考古学博物館 (Museum of Classical Archaeology) が、Faculty of Classics の建物の2階に作られているほどである (オックスフォード大学にも同様の施設あり)。Faculty of Classics に所属する「古典考古学」とは別に、ケンブリッジ大学には人類学と一緒に活動している「考古学」の学部・学科がある。

こうしたヨーロッパの古代史・古典学の研究・教育体制は、「古典学」(Classical Studies, Altertumswissenschaft) として19世紀に確立したこの学問が、単に大学で研究・教育される対象であるにとどまらず、社会的にきわめて大きな意義を有してきたという歴史的経緯と深く関係しているが、いまその点を詳しく論ずることは避けて、この小論では、今夏に私が訪問したオックスフォード大学、ケンブリッジ大学、そしてスコットランドのセント・アンドルーズ大学における古代史・古典学研究の現状についてごく簡単な紹介をおこないたい。

周知のように、オックスフォード大学とケンブリッジ大学はイギリスで最初に作られた大学である。両大学は12~13世紀に設立され、以来、19世紀にロンドン大学が設立されるまで、イングランドに大学はこの2つしかなかった。これらの大学は、最初キリスト教神学の研究や聖職者養成の場として発足・発展したのであるが、ルネサンス時代以降、次第に古代ギリシア・ローマに関する学問を研究と教育の中心に置くようになった。両大学や19世紀以降にイギリスで設立された諸大学において、古代史・古典学がどのように研究・教育され

てきたか、そしてそれがいかなる社会的意義を有してきたかは、この研究会の重要なテーマの一つとして、近い将来じっくり検討してみたいと思っている。

オックスフォード大学は、イギリスで、そしておそらく世界で最も多くの古代史・古典学者をスタッフとして有する大学である。あらゆる分野を網羅的にカバーし、質の高い研究成果をたくさん世に送り出している。しかし、「教授」の数が少ないイギリスの大学ゆえ、オックスフォードの古代史・古典学の分野でも、「教授」の数は少ない。例えば、伝統的な古代史の教授ポストは、ウィッカム講座古代史教授（Wykeham Professor of Ancient History 現在はギリシア史研究者のロバート・パーカー教授が務める）とカムデン講座古代史教授（Camden Professor of Ancient History 現在はローマ史研究者のアラン・ボーマン教授が務める）の2つだけである（ただし、「教授」の肩書きを名乗ることを認められた古代史研究スタッフは他にも若干名存在する）。ケンブリッジ大学も、教授の数は少なく、伝統的な古代史の教授ポストは古代史教授（Professor of Ancient History）のみで、ギリシア考古学・ギリシア史研究者のロビン・オズボーンが現在その任にある。このポスト以外に、ポール・カートリッジが「ギリシア史教授」、ピーター・ガーンジイが「古典古代史教授」の肩書きを持っている。ケンブリッジ大学に属する古代史・古典学のスタッフの数は、オックスフォードに比べると少ないが、独自の学風で、数の多寡を感じさせない優れた研究活動を展開している。いま、「古代史」の教授のポストに言及したが、historian か classicist であるかは重要であるにしても、同じ一つの部局の中で同じように古代の文物を研究しているのであるから、専門分野の区別は実際は曖昧といってよい。オックスフォード大学の現ギリシア語教授が古代の歴史叙述の研究をその専門分野の一つとしているということなど、ごくごく普通である。また、オックスフォード、ケンブリッジ両大学における「教授」「講師」などのポストは「大学」のそれであり、一方でこの両大学にはしっかりした実体を持つコレッジ（学寮）の制度があって、古代史・古典学のスタッフもそのほとんどがコレッジ（学寮）に属し、独自の研究・教育活動をしている。したがって、両大学のスタッフの専門や役割を日本の大学教員のそれのように単純に理解することはできない。

以上のようなオックスフォードとケンブリッジ、両大学の研究・教育体制に関しては、前世紀末から日本の古代史学界でもよく知られるようになった。これは、日本人大学教員の在外研究やイギリス人学者の来日に加えて、若手古代史研究者がオックスフォード、ケンブリッジにしばしば留学するようになったため、一気に情報が増えたからであろう。しかし、本研究会の研究テーマである大学や学問の社会的意義というような問題については、わが国ではほとんど手つかずといってよい。オックスフォード大学は浩瀚な大学史を刊行しているし、各コレッジごとの歴史を書いた書物も膨大な数存在する。未公刊史料を含めれば、今後検討しなければならない素材は無限といってよいほどの量であろう。

次に、スコットランドの伝統的な大学、セント・アンドルーズ大学を眺めてみよう。イングランドに長らく 2 つの大学しか存在しなかったのに対して、スコットランドでは、セント・アンドルーズ大学、エディンバラ大学、グラスゴー大学、そしてアバディーン大学の 4 大学が古くから存在した。中でも、最も早く設立されたのはセント・アンドルーズ大学で、1410~11 年の創立である。16 世紀半ばまでにセント・サルヴェイターズ (1450 年)、セント・レオナード (1512 年)、セント・メアリーズ (1537 年) の 3 コレッジも出来上がった。

セント・アンドルーズはスコットランド中東部、ファイフ地方にある、北海に面した小さな町である (現在の人口は 1 万 1 千人余り)。伝説によれば、ギリシア人修道士がスコットランドの守護聖人である聖アンドルーの遺骨をもたらしたというので、巡礼の地となった。12~13 世紀に建てられたセント・アンドルーズ大聖堂は、スコットランド最大の建築物といわれたことのあるほど壮大な建物であったが、16 世紀後半に宗教改革にもなって略奪・破壊された。しかし、その無惨な廃墟が現在町一番の観光名所になっている。また、セント・アンドルーズは、日本人観光客にはゴルフ発祥の地としての方が有名かもしれない。全英オープンゴルフが開かれる場所としてもよく知られていて、世界で最も有名なゴルフコース Old Course があり、英国ゴルフ博物館 (British Golf Museum) もある。

セント・アンドルーズの町は、人口がオックスフォードやケンブリッジに比べて 10 分の 1 に過ぎないが、オックス・ブリッジと同じように大学が町の中に溶け込んでいる (もっとも、理科系の学問の施設は、町の西側の広々としたところに作られている)。ここで古代史・古典学の研究と教育を担う組織は **School of Greek, Latin & Ancient History** であり、20 名弱の研究・教育スタッフを抱えている。現在の古代史教授は先頃来日したグレッグ・ウルフであり、彼以外にもギリシア史、ヘレニズム時代史、ローマ史、そして古典考古学を専門とするスタッフが歴史系として所属する。この **School** に属してはいないが、関連ある分野として、ビザンティン帝国史の権威ポウル・マグダリーノ教授が、**Bishop Wardlaw Professor of Byzantine History** として **School of History** に所属している。

オックスフォード大学コーパス・クリスティ・コレッジの学寮長や英国学士院院長などを歴任した有名な古典学者ケネス・ドーヴァーはこのセント・アンドルーズで長く教鞭を執った。セント・アンドルーズ大学はイギリスの北辺にはあれども古典学研究の聖地として、日本人西洋古典学者にも夙に知られており、留学生も早くからこの地で学んでいる。また、京都大学大学院文学研究科の西洋古典学講座教授を 5 年間務められたエリザベス・クレイクさんは、京都大学着任前にこの **School of Greek, Latin & Ancient History** の上級講師を務めておられた。今回の私の訪問では、クレイク教授の御配慮により、施設の見学ばかりでなく、**School** の **Director of Research** を務めるハリー・ハイン教授 (**Scotstarvit Professor of Humanity**) や前記のマグダリーノ教授らにお目にかかり、歓談することができた。さらに、大学図書館

などでこの大学の歴史に関する資料を閲覧した。古典学では日本の学界との間に早くから交流があったものの、古代史の分野ではまだ充分ではない。幸い私は、現古代史教授のウルフ博士と1996年、同教授がまだオックスフォード大学でブレイズノウズ・コレッジのフェロウとして勤務していた頃から面識があり、今後古代史やビザンティン帝国史研究の分野でも、セント・アンドルーズ大学と京都大学の交流を積極的に深めてゆきたいと願っている。

セント・アンドルーズ滞在中の日曜日、クレイク教授の夫君で数学者のアレックス・クレイクさん（セント・アンドルーズ大学名誉教授）の運転する車で、ローマ人がスコットランド南部に築いた「アントニヌスの長城」を見学しに出かけた。これは、紀元140年代に五賢帝第4番目のアントニヌス・ピウス帝が命じて築かせた壁である。ローマに敵対するスコットランド先住民から属州としたブリテン島のローマ領を守るための防壁で、東のフォース湾から西のクライド湾に至るまで、約60キロメートルにわたってブリテン島を横断した。この「アントニヌスの長城」はイングランド北部に残る石造の「ハドリアヌスの長城」と異なり、木と芝土でできたもので、2世紀後半には放棄されてしまった。現在ははっきりとその遺跡が見える部分は少ないが、エディンバラとグラスゴーの中間あたりとってよいフォーキーク（Falkirk）の近くに、溝や土手がはっきりと見える部分がある。クレイク夫妻と私は、セント・アンドルーズから車で2時間ほどかけて、そこを訪ねたのである。その日の朝セント・アンドルーズを出発する時、町はミストで包まれていた。目的地はたいへん良いお天気であったが、帰還した夕刻のセント・アンドルーズは再びミストであった。セント・アンドルーズ地方の天候は特殊だそうで、夏でも日がさんさんと射すわけではないようである。冬はもちろん寒い。緯度は56度以上で、極東ではサハリンの北端よりも北に当たる。このような気候風土が違うところで、太陽の光あふれる古代地中海地域で生まれた古典やローマ帝国の歴史・考古学が熱心に研究され・教育されているのである。この理由と経緯についても、イングランドとの違いをも意識しつつ、今後の研究の中で私なりに明らかにしてゆけたらと思っている。

■ 今後の予定

◆研究会大会

「近代ヨーロッパにおける人文学研究・教育と大学の意義」

日 時 : 2005年1月9日(日)

場 所 : 文学部新館第7講義室

報告者 : 上垣 豊氏(龍谷大学), 橋本 伸也氏(広島大学)

南川 高志氏(京都大学), 服部 良久氏(京都大学), 小山 哲氏(京都大学)

◆第1回国際シンポジウム

「近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容 — 政治文化・古典研究・大学 — 」

日 時 : 2005年3月6日(日)

場 所 : 文学部新館第3講義室

基調報告者 : ヴェルナー・エック(ドイツ・ケルン大学)

エドワルト・オパリンスキ(ポーランド科学アカデミー 歴史学研究所)

葛西 康德氏(新潟大学)

森村 敏己氏(一橋大学)

《後記》

残暑もようやく和らぎ、虫の音に秋の訪れを感じるこのごろです。皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。新COE研究会「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」のニューズレター第1号をお届けいたします。

本研究会は7月より本格的に活動を開始いたしました。まずは第1回研究会を滞りなく終了し、順調に船出することができたと安堵しております。来年の1月と3月には相次いで研究会大会と国際シンポジウムの開催を予定しており、現在鋭意準備中です。研究会大会とシンポジウムの概要は上記の通りです。詳細につきましては、後日ホームページに掲載の上、さらに別途ご案内いたします。なにとぞ皆様のお力添えを賜りますよう、心よりお願い申し上げます。(宮坂)

EUROHUM 研究会事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科西洋史研究室(担当:宮坂)

Tel/Fax : 075-753-2791

E-mail : eurohum-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

URL : <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurohum/>
